

# 生き物の名前

福井県の市街地に近い低山を登っていると、登山道の周りの樹木にそれぞれ名札が付けられているのをよく見かけます。地元の小学校の名前も併記されていますから、生徒たちが学校で一生懸命作ってくれたものを、登山の折に汗を流しながら取り付けてくれたのでしょう。そのことを思うと感謝の気持ちで一杯になります。この学校の先生達はいい教育をしていますね。作った生徒たちは樹木の名前を覚え、さらに登山者にも喜んでもらえるという一石二鳥のアイデアです。

登山者の中には、「ああ、これがドウダンツツジか」と名前を知って喜び、「子供たちが用意してくれたんだね」と生徒たちに感謝していました。こんな光景を見ると、「生徒たちにも是非知らせてやりたいなあ」とつい思ってしまいます。

最近市街地ではウォーキングが、また山では低山登山が流行っています。ウォーキングも登山も生活習慣病予防のための健康法のようなのですが、みなさんは目的を遂げるとさっさと引き上げてしまいます。

歩く健康を考えるのであれば、「身体的な健康」とともに、「精神的な健康」も考えてみたいものです。ウォーキングや登山の楽しみは、身体への健康の他に、仕事上の些事を忘れて心を自然に解き放って、四季折々の美しいものを楽しみ、花鳥風月の世界に遊ぶ文化的行為でもあります。

ここで、さらに自然が隠し持っている不思議や謎を知って、自然への理解を深めることが加われば、ウォーキングや登山の次元もさらに高まり、いっそう皆さんの感性の世界が開かれるというわけです。

今の子供たちを観察していると、自然の中で出会う鳥や森の木々や昆虫などの名前を知らない者が多いことに気が付きます。大人たちも、せっかくウォーキングや登山を愉しむのであれば、まず、身近なものの名を覚えることから始めてみてはどうでしょうか。

動物達は五官で外界を認識しますが、人間はものに名前を付けることによって外界の事物と関係付けて認識し、それによって自らを安心させるというところがあります。

「道端に黄色い花が咲いている」とか「赤い花に、黄色い蝶が止まっている」と、ただ漠然と見るのではなく、「もう、セイヨウタンポポが咲いている。日本タンポポが少なくなったなあ」とか「百日草に、キアゲハが止まって、蜜を吸っている。夏も盛りだなあ」と言葉にするほうが、ずっと自分の世界が広がり、豊かになるはずです。こういう会話を通して、それを子供達に伝えていきたいですね。

私たちの周りを取り巻く自然物や事象の名前を覚えるだけでも、ウォーキングや登山はもとより、人生の内容がどんなに豊かになり、楽しくなることが想像して見て下さ

い。精神の健康には極上の処方箋といえるのではないでしょうか。

都会にいと、自然と触れ合う機会がないと皆さん言いますが、少し注意深く眺めていけば、多彩な自然が散在していることに気が付くはず。たとえば、縁石のすぐ側にも、オオイヌノフグリやスズメノカタビラなどの雑草が見られます。アンテナを張っていると都会で「オニヤンマの羽化」さえも見る事が出来るのです。まず、生き物達の名前を覚えれば、次は「なぜ」という好奇心を注ぐことによって、意外に新しい世界が開けてきます。

さて、少年時代に昆虫図鑑で見た虫たちの名前に何時も疑問を感じていた一人ですが、モンシロチョウ一つとってみても *Pieris rapae crucivora* BOISDUVAL となっています。「学名だそうだけど、さっぱり分からないなあ、とにかくチンプンカンプンだよ」と友人達に話していたのを昨日のように思い出します。

昆虫採集の標本作りでも、友人たちの作品や県内の夏休みの宿題で出品された作品では、必ずラテン語で表記していましたが、私はというと、分からないことを書くのが苦手というより後ろめたさを感じて、何時も日本語のみを表記し、ラテン語の「呪文のようなもの」は書かないことにしていました。何故なら、日本語の表記で十分分かってもらえるし、第一ラテン語の呪文の意味を聞かれても答えられないからです。

この学名というのは昆虫だけでなく、あらゆる種類の生き物に付けられた世界共通の名前です。学名はラテン語で表記されており、これは18世紀にスウェーデンの学者リンネ(カール・フォン・リンネ:リンネ家のカール)が提唱したものです。

1758年に出版されたリンネの著書、「自然の体系:第10版」で「二名式命名法」が動物にも使われ、これが今でも世界共通のルールとして使われています。「国際動物命名規約」といって、昆虫を含めた動物に学名を付ける場合に必ず目を通さなければならぬルールブックというわけです。日本では、杉田玄白が「解体新書」を著した頃にあたります。この最新版は2001年1月に発効しています。この規約に則らずに学名を付けても、研究者から無視され、有効と認められない仕組みになっています。

リンネの「二名式命名法」は、「蝶百態」の「アゲハ」のところでも述べたように、「属名+種名+命名者名」で一つの種類を表します。

「属名」にはギリシャ語やラテン語の名詞が使われ、

「種名」は形容詞が多く使われ、

「属名も種名もギリシャ神話に出てくる人物の名前が多く使われている」

などということは、昆虫図鑑には当たり前のように、説明もなくラテン語の表記がなされ、ラテン語も知らず、英語やギリシャ神話さえ知らなかった少年時代の私に理解できるわけがありませんでした。

さらに、「三名式命名法」では、「属名＋種名＋亜種名＋命名者名」のように表記されるようになっており、亜種名などは、その種に地域異変が大きい場合などに命名されます。これが分かれば、蝶に限らず他の生物を知る場合に非常に有効で、面白い材料として使うことができます。

さて、16世紀に入って、大航海時代が始まると、ヨーロッパの船乗り達がアメリカ大陸、南アメリカ大陸、熱帯アジア、アフリカ大陸にどんどん出かけていきます。そこで彼らが見た生き物がヨーロッパのような単調で、退屈で貧相なところに比べて、どんなに驚異に満ちたものであったかは想像を絶するものだったに違いありません。

子供の頃、私が通った小学校の図書館には少年向けの冒険者達の数々の冒険談が山のようにありました。今考えると、何故この種の本が多かったのか不思議でありませんが、ヘディンの一連のシリーズもの、猛獣狩り、熱帯のジャングルでの昆虫採集などは片っ端から読んで、彼らの冒険談に胸躍らせ、彼らが熱帯地方で見た不思議な自然、物凄い数の、美しく、しかも不思議で訳のわからない無数の動物や植物達などに思いをはせ、考えただけでも気が遠くなるような興奮を覚えました。

当時、彼らの植民地では、人々が築いてきた文化や習慣を根こそぎ破壊し、彼らの財産や土地の産物を国を挙げて強制的に収奪し、さらに、現地の人たちを暴力で屈服させ、強制的に自国に都合の良い貿易協定を結んで利益を得ていました。

これらの国の目的の一つに「動物や植物の標本を集めて本国に持ち帰る」というのがありました。標本を受け取った人々は、船から次から次に降ろされる積荷は、見たこともない奇怪な動物や植物できっと驚きの連続だったに違いありません。

当時、この珍奇な生物を収集、研究していたのは高値の標本を買い集める財力のあった裕福な貴族達といわれています。このころに、本格的な「博物学」が始まったと思われまます。

また、「日本の蝶」の大部分は、残念ながら日本人によって命名されたものではなく、江戸末期から明治初期にかけて来日していたプライヤー、シーボルト、フェントンらの外国人医師や宣教師によって採集され、本国に送られて研究され、命名されています。命名者は、まだ見ぬ異国日本への思いを募らせながら、僅かに知っている日本語を使って学名をつけているのが蝶の名前から窺われます。

17世紀も末頃になると、大量の生物標本が蓄積され、これらを陳列しておくだけでは具合が悪くなり、

- ①集まった沢山の標本をどう分類し、体系図づけたらよいのだろうか。
- ②送られてきた標本は、自然の中では実際にはどんな風に生きていたのだろうか。
- ③何故生物はこんな形態になったのか。

など、ヨーロッパの自然を対象にし、種の多様性など考えても見なかった人たちが、植民地から手に入れた膨大な動物や植物を前にして、このことを真剣に考えるようになりました。

実は、ここがヨーロッパの人たちの「偉いな」と思うところですが、膨大な数の地球上の生物種を、何かを基準にして分類しようと、多くの学者達がこれに挑戦していますが、その中で、現在でも使われている「分類の基本的な方法や仕組み」を考え出したのがリンネだったというわけです。その後、ダーウィンの登場となりますが、それはまた別の機会に譲ります。

以上、ネーミングの歴史をちょっと覗いてみましたが、私たちがものの名前を出すときにその裏にどのような歴史が隠れているかなどあまり考えませんが、何故そう言うんだらうと考えてみるだけでも楽しいものです。

# 蛇

何故虫偏か？

小学校で習ったことで、「てへんは手に関係がある文字だよ。さんずいは水に関係があるよ。むしへんは虫に関係があるよ」と教わり、「なるほどそうなっているな」と納得しましたが、家に帰って辞書を眺めていると、「へび(蛇)やかえる(蛙)は虫じゃないのにむしへんだ」と気付き、先生に質問すれば何と答えてくれるだろうかと思地悪な気持ちになったことを覚えています。

実は、これには訳があって、江戸時代には「犬や猫などの動物の他は全て虫である」とされていたようです。したがって、へび(蛇)もかえる(蛙)もたこ(蛸)もとかげ(蜥蜴)もすべて虫編で出来ているわけですね。このように、先生から教えてもらった知識の中に隠れた情報を見つけ出してOne Step Upをはかれば勉強の愉しみも更に増えていきます。

「生き物の名前を知ったり、蝶や虫のことにいくら詳しくなっても、実生活では、何の役にも立たないじゃないか」と時々周りの人から皮肉られたり、指摘されたりすることがあります。それに対し、私が何時も彼らに返す言葉は、「知識は精神を若返らせる」といったチャーリー・チャップリンの言葉です。どんなことに関しても、「最大の財産は知っていること」、「最大のリスクは知らないでいること」だと思っています。「一見無駄に見えたり、役に立ちそうにないことでも、永い人生の中で、何時の日かそれが物事を考える基礎になっているということだってあるよ」と学生たちに話すことがあります。

私の「蝶撮影の趣味」は、高校時代、大学時代、企業に勤めていた時代、教員時代を通じて、殆ど知る人はいませんでした。別に隠していたわけではありません。「読書」や「音楽鑑賞」などであれば「趣味は何」と聞かれたら気軽に答えますが、自分が深く関わっている趣味については、「何それ？」と聞かれていちいち説明するのが面

倒なので、他人から深く追求されなかったこともあって、黙っていたというのが実情です。

それはともかく、「何か趣味を始めてみたいな」と思っている人、「蝶の撮影」を始めてみませんか。